新潟日報2019年5月12日

Column

座標軸

外国人の子ども

受け入れを整えるために

外国人の子どもたちに日本語を教えている新潟市の団体「りてらこや新潟」の代表、佐々木香織さんから、間もなく刊行するという冊子をいただいた。

タイトルは「元『外国につながる子ども』の奮闘記」。「外国につながる子」とは、親が外国出身で、外国の言葉や文化を持つ子を指している。

冊子では、かつて県内の学校に通っていた若者9人を佐々木さんがインタビュー形式で紹介している。日本に来て、どう学んできたかなどが率直に語られている。

中でも母親がフィリピン人の男性の話には心を打たれる。

日本の小学校に4年で転入し、1年生の漢字ドリルを必死にやった。高校ではいじめに遭い、1年留年した。

卒業後はコンビニでバイトをして、フィリピンにいる妹の学費に充ててきた。進学して、自動車整備士になるのが夢だが、「まずは妹を卒業させてから」と話す。懸命に生きる姿が伝わってくる。

人手不足を背景に、外国人労働者の門戸を広げる改正入管難民法が4月、施行された。県内でも外国人が増えそうだ。その子どもの姿もより身近になるだろう。

彼らを受け入れる態勢整備を急がねばならないが、それには今の実情を理解することが大事だ。

冊子はその助けとなる。佐々木さんは「日本で未来をつかもうと奮闘している姿を知るきっかけにしてほしい」と願っている。冊子については「りてらこや新潟」のホームページから問い合わせを。

（論説編集委員・山田孝夫）